

中世大学の成立

松 川 成 夫

まえがき

中世大学の歴史に関しては、数多くのすぐれた研究や著作がすでに公けにされている。⁽¹⁾中でもP・H・デニフレ、G・カウフマン、H・ラシドールの研究は、もっとも権威あるもののひとつとして学界において定評のあるものとされている。けれどもこれらの研究を通観してわかることは、中世の大学の成立事情については、ほとんどといってよい確な説明がなされていないということである。⁽²⁾このことから推察されるように、もともとこの問題についての歴史的研究は困難なわざであり、とりわけわれわれ日本人がこれに従事することは至難のわざといわなければならない。この点をいちおう考慮にいたうえで、私は自分の研究課題をつぎのような事柄にしばってみた。中世大学の成立事情やその発達について、専門の歴史研究者のように未知の新史料を発見し、これを整理するといった仕事はとてできない。自分の研究の基礎になるものは既刊の史料や文献であるが、それらに準拠しながら私はとくに、教育の内容や方法の面に重点をおいて調べてみたいと思う。もちろん、教育の理念とか、その理念を現実的に支えている教育の制度とかの問題に全然触れないわけではないし、教育の内容や方法というものは、そもそも教育の理念や制度とのかかわりにおいて理解されるべきものであるから、研究の対象としては中世大学の理念的基礎および法制的研究もその中に含むべきである。しかし重点はどこまでも中世大学で採用せられた学問内容、教養内容を明らかにし、それらの内容がどのような状況のもとで学ばれたか、その場合の教授方法などを解明することにある。

本稿は右のような研究課題を念頭におきながら、中世大学成立の歴史的事情の全貌を概観し、今後の特殊的個別研究への導入部を素描したものである。本研究が主として依拠しようとしている前記のデニフレ、カウフマン、ラシドールの研究は、それぞれ質量ともに実に充実したもので、内容の理解把握そのものに相当の努力が要求せられ、また時日も必要である。今回、本稿がこのような形で、はなはだ不整備のままで発表されることは心苦しいしであるが、これを出発点としてさらにつぎの段階へ進むべく、あえてこれまでの成果をいちおう整理して本稿を作成することとしたのである。

1

いわゆる高等教育の機関という意味での大学の歴史は、古くギリシャ、ローマの時代にまでさかのぼることができる。古代の大学としては、たとえばプラトンが紀元前三八五年ごろアテナイの郊外に起したといわれるアカデメイア、アリストテレスがやはり紀元前三三五年にアテナイの東北郊外に開いたとされているリュケイオン、またプトレマイオス家の庇護のもとにエジプトの首都アレクサンドレイアに設立せられたムウセイオンなどがあり、これらはいずれも当時の学問や文化の中心地として、世界の各地方からすぐれた学徒を集めて研究がおこなわれていたものであった。⁽³⁾しかしながら、大学の起源は普通ヨーロッパ中世の一―三世紀に求めるのが通説であり、そしてこのことには正当な理由があるといわれる。つまり、ギリシャ、ローマ世界にも高等教育はおこなわれており、実にすぐれた法律、修辞学、哲学などの教授がなされていた。けれども、そこには一定のカリキュラムや学位授与の機構をもった学部やカレッジの組織はみられない。そこでの高等教育は学問の恒久的な制度にまで組織だてられなかったという点と、もうひとつの指摘は、大学の自由、自治（一般にアカデミック・フリーダムといわれるもの）という観点から、中世において自治の特権を公認せられ、当時の社会で国の中の国、都市の中の都市とよばれた学徒団体の形成を今日の大学の源流とみなすという点とが普通その理由としてあげられるのである。かくして、「大学は一二世紀に最初におこり、近代の大学はその基本的性格においては、サレルノ、ボローニア、パリ、モンペリエおよびオクスフォードの諸大学に由来する」⁽⁴⁾とされるのである。

ところで、中世の大学は中世の社会制度の根幹をなすところの職業組合の一型態であった。大学 University の語源であるウニヴェルシ

タス universitas は学問の機関や場所をさしていたのではなく、元来多数の人々の集団を意味し、中世社会に特有な同業者たちの組合団体（ギルド、ツunft）や、自治都市内部の市民団体などを意味する言葉であった。⁽⁵⁾ 中世の商人や職人は組合を設けて自由競争を避け、厳重な規約のもとに各自の利益を保護したが、これと同じように教師や学生もまたそれぞれ組合を設けて各自の特権の獲得に努めたのである。よく知られているように、中世においては団体的な傾向が著しかった。これは国家的結合がまだ緩やかであった当時においては自然の現象であり、中世においてはだいたいにおいて何らかの団体に属さないという人は考えられなかった。例えば、フイレンツェの市民は何かの組合の一員でなければならなかったので、ダンテも医師と薬剤師の組合に属していたといわれている。⁽⁶⁾ ところが、よその土地から都市へやってきた商人の場合は、同じよそ者同志が数人集まれば、非市民として相互の協力と保護のために組合団体をつくるのが公認されていた。これと同じように、異郷出身の教師や学生たちの場合も、彼らは市民ではないので市民権はもたない、従って都市からの保護をうけることはできない、そこで彼ら自身の組合団体によって自己保護に頼らなければならなかった。

このような現象を理解するために、一二世紀頃の都市を中心として起こったところの知的欲求の高まりに注目しなければならない。先ずイタリアに始まり、ついでヨーロッパの各地に広まった都市においては、商業の発達に伴ない、文字の必要を痛感させし、また商品貨幣経済に即応するための法律体系が要求せられるようになる。シェークスピアの「ヴェニスの商人」がよく物語っているように、シャイロックのブルジョアジーが横行し、金銭上の争い、民法上の争いが続出し、これらの争いを解決すべく、法律体系を周知しこれを自由に駆使しうる法律専門家の活躍が期待せられた。「ヴェニスの商人」の立役者であったポーシア（にせのボローニアの法学博士）は、こうした時代が生みだし、た新しい職業の需要にほかならなかった。彼らはドクトルと呼ばれて、ローマ法に通暁しており、法官や弁護士として活躍していた。好奇心と野心とに燃えた青年たちが、従来からの伝統的な学問であった自由学芸 artes liberales を求めるとともに、この法律家たちから法律を学ぶために、彼らの私塾に集まるようになった。イルネリウスのようなすぐれた法学者が活動したボローニアは法学の中心となり、市民出身の青年たちばかりでなく、ヨーロッパ各地から学生をひきつけはじめた。多くの学生たちを集めたボローニアの教師の諸学校が隆盛を誇るようになったのは、だいたい一一世紀頃といわれている。このようにして、都市に集いよってきた青年学徒たちの間に、やがてしだいにひとつ

の自治組織が生まれるようになり、これがいわゆるウニヴェルシタスとして成立し、今日の大学の源流とみなされるのであるが、このウニヴェルシタス成立の端緒をなしたものが、皇帝や教皇による学徒保護の政策であった点は注目されなければならない。

イルネリウスがボローニアで活躍をした頃から約半世紀余りたった一一五八年に、神聖ローマ皇帝フリードリヒ一世によって、この町に法律の学習のために集まっていた異郷出身の学生を保護する目的の特許状が発せられた。この特許状は正式には *Authentica Habita* というが、通常この文書の冒頭の言葉によって *Habita* と称せられている。つまり、フリードリヒ一世がイタリアにきて、ボローニア市外に幕営したさいに、この市に来ていた学生たち（なかには、ドイツ人学生が多かった）を引見し、彼らの生活状態を問い、何か不自由なことはないかと尋ねたのに対して、ひとりの教師が彼らを代表して「大へんうまくいっており、町の人もだいいじにしてくれるが、ただときどき町の連中が勝手に罪もない学徒を拘禁したり、他人の犯した罪のために同僚のだれかれを捕えたりすることがあって困る」と訴えた。このようなことのないようにとの目的から一一五八年一月に *Habita* を発表した。この内容は「何人もこれら学徒の往復に際して危害を加えてはならぬこと、他人の罪のために罪なき学徒を罰してはならないこと」であった。要するにこの *Habita* は、ボローニアに集まっていた他国の学生の身分を保護する目的の特許状なのであったが、後代になってこれは大学自治のマグナ・カルタとさえよばれ、大学自治の法的根拠とみなされるようになり、また大学が公認の学校となった端緒をなすものとみなされたのである。⁽⁷⁾

Habita が出て一八年後の一一七六年、ローマ教皇カリストウス四世の使節がボローニアに来たとき、彼は学徒たちから家賃問題についての訴えをきいた。多数の学徒が町に流入するため自然住宅難がおこる。下宿料が暴騰したのである。学徒の代表は「金持どもは現に間貸ししている室の室料値上げを宣言し、そのために学徒はそこを追いつけられる始末である」と訴えた。使節はこれを聞いて市民に布告し、契約期限のこないうちに家賃の値上げをするような家主は破門にすると宣告した。これは余り効果がなかったが、数年後に再びボローニアにきた教皇使節ペトルスはまた同じような陳情をうけ、同じような措置を講じたという。さらにこれを聞いた教皇クレメンス三世は、この使節の措置を公式に認め、ボローニアの司教に対して、毎年教師および生徒の会合を開いて生活事情を聴取するように命じているのである。⁽⁸⁾

以上のような皇帝や教皇の学徒保護政策に促進せられて、自由な学徒の群れはしだいにひとつの大きな社会的勢力となってゆき、やがて彼

らの間にひとつの自治組織が生まれ、それがウニヴェルシタスとよばれるようになったことは前述のとおりである。ボローニアにおける学徒のウニヴェルシタスは、学徒の出身地をアルプスを境として南北にわけて、それぞれ自治団体として成立したが、それはまだひとつの学校と大学とかいふべきものではない。既述のように、ボローニアには多くの学者がいてそれぞれ私塾を開いており、それらの学者に学ぶために多数の学生が市内に住んでいる。これらの学生たちが自分たちの利益のために団体を作っていたのにすぎない。彼らはこれによって、礼拝、病人看護、死亡者埋葬などの権利を獲得するばかりでなく、何よりもまず生活必需品や家賃の不当な値上げについて市当局と交渉をし、彼らの生活を確保しようとしたのであった。

都市当局もまた、私塾群の存在や他国からの多くの学徒の存在をだいにした。都市やその市民にとっては、まず経済的に、そしてつぎには都市の文化的装飾として学徒や教師の群れは重要な存在なのであった。そのために都市相互の間にすぐれた学者の争奪が行われているし、その結果としてもとは私教師である学者に都市当局が俸給を支給するというようなこともしだいに起こりつつあった。事実一二〇〇年代に入って、ボローニアは大規模な学徒引き抜きを蒙って、一二〇四年には多数の教師と学生がヴィツェンツァに移住しており、一二二二年には千人以上、恐らく数千人にのぼる学徒が、集団契約によってボローニアからパドヴァに移住した。一二二八年にはさらにヴェルセリ市がこのパドヴァに移住した学徒たちをそっくりそのまま引き抜こうと画策し、極秘裡に学徒代表へ特使を送りこんで契約に成功し、学徒の集団の再移転が行われた。⁽¹⁰⁾ 学徒のウニヴェルシタスが都市当局と交渉するさいに、彼らが切札にしたのは市外退去ということであった。市外退去がなによりに交渉の切札になりえたかという点、ひとつには当時の大学が校舎というものをもたないためであった。講義は教授の家や教会関係の建物、あるいは公共建築物の柱廊（アーケード）や広場で行われた。従って学生が一致すれば、あすにも他の都市に移転することができた。

以上によって明らかになったように、ウニヴェルシタスは学徒が共同の目的のために一致して自治的な生活を始めた時の一種の組織の名称であって、今日の大学ユニヴァーシティのような学校 *Lehranstalt* を意味するものではなかった。これに対して学校としての大学に相当するものは、ストゥディウム・ゲネラーレ *Studium Generale* とよばれていた。これは元来は、あらゆる国民、あらゆる地方、あらゆる階

級の学生が相集って、学問研究を行なう場所を意味した。従ってこれは学問の研究対象の普遍性や根源性を意味するものではない。あらゆる学問の学問、原理の原理を探究するという意味でのゲネラーレではなく、⁽¹¹⁾そこに来て学ぶものの資格を制限しないといういわば消極的意義をあらわす呼び名であった。つまり、どこの国民でも、いかなる階級に属するものでも学問研究に堪えられるものでさえあれば、この研究団体に加わることを許すという意味で、このように名づけられたのである。そしてこの語は、一三世紀初めまでは一般的にはなっていない。しかも当時はこの語はきわめてあいまいな意味しかもたなかったのであるが、だいたいにおいてつぎの三つの特徴を言いあらわしているように思われる。

- (一) その学校はたんに特定の国や地方の学生だけでなく、あらゆる地方から学生たちをひきつけ招いたこと、
- (二) それは高等教育の場所であったこと、いいかえれば、少なくとも高級な学科——神学、法学、医学——のどれかひとつがそこでは教えられたこと、

(三) このような学科はかなりの数の教師——少なくとも二人以上の——によって教えられたこと、

これらの諸特徴のうち、第一のものが一義的でありまた基本的である。そしてある特定の学校がストゥディウム・ゲネラーレであるかないかという問題は、もともと慣習や慣例によって決められる問題なのであり、なにかの権威によるものではなかった。けれども、一三世紀初めにはこの用語がとくに適用され、しかも独自の特権をほしきままにしていたストゥディアが三つあった。それは神学と人文のパリ、法学のボローニア、医学のサレルノである。これらの場所のどこかで教えたことがあり、またこれら権威あるギルドへの加入を認められた教師は、他の下級のストゥディアのどこにおいても教えることのできる承認と許可とが確実にえられた。逆に、これら権威あるストゥディアは、なんらかの新規の試験をすることなしには他の学校から教師をうけいれることはなかった。かくしてストゥディウム・ゲネラーレの本来の概念に、しだいに新しい別の要素が付加せられてゆく。つまり、これが「どこでも教えられる権利」(jus ubique docendi)としてのちに確立されるものであるが、さいしょのうちにこれは「あるストゥディアが授与したところの教師の資格(mastership)のための特定の全世界的有効性についてのあいまいな概念」⁽¹²⁾(a vague notion of a certain ecumenical validity)にすぎなかったのである。一三世紀には、

ボローニアやパリのほかに多くの学校がこのストゥディウム・ゲネラーレの地位を要求したし、事実、この用語がもっとも多く使われたイタリアでは、ボローニアやパリと同じ教育を与えたことを示そうとした学校ではどこでもこれが採用せられた。この用語がますます拡大されて使われるようになったのは、初期の学校の多くがこれらの場所のひとつで現に教えたことのある教師たちによって設立せられたという事実によるのである。

一三世紀後半になると、ストゥディウム・ゲネラーレを建設するこの無制限の自由はしだいに止んだ。そしてその休止にともない、その語の意味に重要な変化がみられるに至った。だいたい同じころに、ヨーロッパの二大世俗勢力——教皇と皇帝——が学校を建立するという考え方があらわれた。この学校は、偉大な教育の中心であるパリと同じ水準をもつもので、権威の力を背景に運用されるものと考えられた。一二二四年、ドイツ皇帝フリードリヒ二世はナポリにストゥディウム・ゲネラーレを建設し、またいっぽう、一二四四年（または一二四五年）に教皇インノケンチウス四世が教皇庁内に同じくこれを建てた。この新しいストゥディウム・ゲネラーレの建立は、新たにつくりだされた公証人の勢力と同じく、教皇や皇帝の特権のひとつであるとの考えを示唆しているようである。その上、トゥールーズの卒業生に対してパリやボローニアの卒業生がうけていた同じ特権と認定を与えるために、一二三三年にその大学で教師職へいれたものはだれでもすべての他のストゥディアで、それ以上のなんらの試験もなしに教えることは自由に許されるべきであるということを宣言した *Bulla*（教皇の大教書）が発せられた。同じように、他の諸都市でもこうした権利の獲得のために学校の設置に力をつくした。このような教書は、要するにストゥディウム・ゲネラーレの地位を与え、またパリやボローニアのような特別な大学のもつ特権を与えるというのである。そしてこの教書の実際に目ざしていた目的は、なによりもまず聖職者に対して、彼らが聖職禄をうけながらそれらにおいて学ぶ権利を与えることにあったと思われる。なぜなら、当時の教会法や慣習によれば、彼らはストゥディアへは一般に禁じられていたからである。しかしながらしだいに「どこでも教えられる権利」は、教皇や皇帝の主要な目的としてみなされるようになり、一二九一年（または一二九二年のいずれか）に、ボローニアとパリとが教皇ニコラス四世の教書によって形式上は同じ特権を授けられたのであるが、このときから、「どこでも教えられる権利」はストゥディウム・ゲネラーレの不可欠の本質であって、この特権を所持しない学校はいかなる学校も皇帝もしくは教皇からの教書なしにはそれを与えるこ

とはできないという考え方が徐々に地歩をえてきた。同じころ、オクスフォードやパドゥアのような古いストゥディアがいくつかあり、これらは教皇や皇帝によって建立されたものではなく、従って「どこでも教えられる権利」の容認をえていない。しかしながらこれらのストゥディアは、ストゥディウム・ゲネラーレとしての地位を獲得している。そして、こういう場合かかる学校が「慣習上」(ex consuetudine) ストゥディウム・ゲネラーレであったといわれる。

以上によって明らかにせられたように、ストゥディウム・ゲネラーレは元来そこに来て学ぶものの資格を制限しない学問研究の場所を意味したのであったが、従ってある学校が名声を博して、各地方各国々からの学徒を多く迎え入れるようになると、これをストゥディウム・ゲネラーレとよぶことも少なくなかったし、イタリアにはとりわけこうした例は多かったようである。ところが一三世紀の頃からは、この語の用法にひとつの限定が与えられるに至った。つまり、一二二四年ドイツ皇帝フリードリヒ二世がナポリにストゥディウム・ゲネラーレを建て、教皇グレゴリウス九世が一二三〇年にフランスのトゥールーズに、また一二四四年教皇インノケンチウス四世がローマの教皇庁内に同じくこれを建てて好学者の学習を許し、そこにおいて所定の学業を修めたものにはどこにおいても教師として講壇に立つことのできる権利を認めてからは、この権利を有する学校をとくにストゥディウム・ゲネラーレとよぶようになり、これが後の大学の公けの資格となった。その卒業生に対し、教皇から認められた「どこでも教えられる権利」(jus ubique docendi)を付与することが、ストゥディウム・ゲネラーレの不可欠の条件として考えられるようになった。学徒の集団が学問研究の機関としてストゥディウムとよばれたことは当然であるが、これが公けに認められてその出身者が学士・マスターとしての資格を与えられ、しかもどこに行っても学士としての待遇をうけ、教師として迎えられ、ためには公式の認可を必要とした。かくしてローマ教皇が各ストゥディウムごとにとくに教書 *Bulla* をもってそのストゥディウムの一般的資格を承認するという慣例が始まり、それをばストゥディウム・ゲネラーレとよぶようになった。従ってこの意味での大学は、広く一般に認められた研究の機関というような意味をもち、そこには大学というものは普遍的ヨーロッパつまりキリスト教的共同体に属するという思想があり、大学の権威はこの共同体の最高権威者である教皇(または皇帝)に帰するものと考えられていたのである。時としては君主や都市によって大学が起こされることもあったが、その場合にも大学の普遍ヨーロッパ的理念は決して失われておらず、大学設立の認可を皇帝、とくに

教皇の承認にまつことがふつうであった。このストゥディウム・ゲネラーレの中に、教師や学生たちによって結ばれたユニヴェルシタスがあり、一四世紀以後、この両者が同義語となったといわれている。さらに一五世紀になると、学問のあらゆる領域の総合的研究を意味するユニヴェルシタス・リテラルム *universitas litterarum* のような近代的な意味を補充し、ついに近代の用語としてのユニヴァーシティの意味が固定するようになったのである。

2

既述のストゥディウム・ゲネラーレに関する論述のなかで、ひとつの注目すべき観点を提供しているのは、堀米庸三教授の所論である。⁽¹³⁾ 同氏はこの語の意味をより内容的に理解するために、用語の上で対極的關係にあるストゥディウム・スペキアルレ *Studium Speciale* またはストゥディウム・パルティクラーレ *Studium Particulare* との関連において考えている。ストゥディウム・ゲネラーレという言葉が用いられるようになったのは、ほぼ一三世紀以来のことであるが、これは要するに、ストゥディウム・スペキアルレがストゥディウム・ゲネラーレへと生長していった過程をしめしている。ストゥディウム・スペキアルレ（パルティクラーレ）という言葉は、実際に用いられたものではなかったが、この言葉で言いあらわされていることは修道院や司教寺院（カテドラル）の付属学校、都市の初等学校の教育のことである。そしてこれらの学校が一三世紀、つまり大学が起るまでのヨーロッパの教育機関のすべてであった。そしてここで教えられていたものが、かの七自由科（文法・修辞学・論理学・算術・地理・天文・音楽）であった。しかしながら、一一世紀以来の社会の新しい発展は新しい知識への要求を生んだ。中世初期以来の七自由科は、それが主として講ぜられていた修道院学校とともに完全に過去のものとなった。修道院学校はその性質や場所からしても社会の新しい動きに応ずることはむづかしく、また多数の学生を集めるのに適していなかった。これに対して司教寺院付属学校は、カテドラルが一一世紀以来発展を続ける都市にあった為、修道院とは全く異なった有利な条件をもっていた。ここに学問の中心が修道院からカテドラルに移る理由があった。しかし都市、とりわけイタリアの都市には教会と直接に關係のない教育、つまり法律を中心とした教育の伝統もあって、司教寺院学校が多くの場合、学問の中心であったとはいえず、一般的には都市が新しい学問や教育の中心とな

つたとみてよいであろう。この新しい学問は、従来の七自由科が一般教養的色彩を主としたのに対して、きわめて専門職業的知識という面が強い。寺院における高位の僧侶にとって、神学や哲学はいうまでもないが、法律とくに教会法の知識が当時は不可欠であった。それなしには新時代に即応する教会政治の処理は不可能であった。このことは都市の一般市民の場合も同様であり、世俗の支配者にとっても専門的知識、とくに法律についての専門知識が必須とせられた。このような社会の新しい動きに対する適応の過程、つまり専門知識人の教育と、専門知識人としての資格を与えるということのために、司教寺院付属学校ないし都市の法律学校から一二世紀末ないし一三世紀初頭のヨーロッパ最古の大学が生まれてゆくのである。

以上が堀米教授の所論の要旨であるが、ここには中世大学の成立事情を当時の社会の教養内容との関連でとらえようとするアプローチがうかがえるのである。ストゥディウム・パルティクラレから、ストゥディウム・ゲネラーレへの変遷の過程に大学の起源を見いだそうとする観点に立っている。私はこの観点到に深い共感を覚えると同時に、過去の七自由科の一般教養的性格からしだいに専門職業的教養内容のものへと推移してゆく過程を、教育史的探究のもとに実証研究をしたいと思うに至った。このような研究課題をもつものとして、私は本稿の補説として、また今後の探究のための基礎工事ともなるべきものとして、大学発祥以前の教養内容の中心をなしていた七自由科について概説しておきたい。⁽¹⁴⁾

だいたい六世紀ころには、ヨーロッパの教育はほとんど完全にキリスト教的なものとなった。教皇権が確立し、異教主義教育（ギリシャ主義教育）は許されなかった。そこで、教会、修道院、本山だけが公けの教育活動の中心をなしており、中世の教育を考えると、これらはたしした教育的機能は無視することのできない重要性をもつのである。まず修道院は、大人の僧侶を収容しただけでなく、将来僧侶になろうとしている児童を収容していた。普通五歳ないし七歳位から一五歳位までを教育したが、さらに僧侶志望でない一般の児童をも収容して二種の教育をした。僧侶志望者である神に献げられた子供は正員として内校（*schola interior*）で、一般の児童は外員として外校（*schola exterior*）で教育せられた。彼らは修道院に宿泊し、厳格な訓育を受けねばならなかった。起床から就寝までの一挙一動が厳重な規律と監督によって律せられ、懲罰としては断食、苦行、鞭がおこなわれたとされている。教授内容には、初等教科と高等教科の二種があり、前者

は読方、書方、唱歌、算術、ラテン語からなり、後者は七自由科であった。この修道院とならんで、中世教育に大きな力をおよぼしたものは本山である。本山（カテドラル cathedral）というのは、司教（ビショップ bishop）のいる教会のことで、近隣の司祭たちの教会を監督指導する責任をもっている教会である。正しくは司教座聖堂（ecclesia cathedralis）という。ここでは自然、司祭やその後継者の指導養成をはからねばならなくなった。はじめは司教自身が教師の役を直接はたし、教室も必らずしもとくに設けられない程度に未分化であったが、教会そのものの発展と内部組織の分化につれて、司教館とともに住んでいる司祭たちの間に、いわゆる司教座聖堂附参事会 chapter がつくられ、それらのなかから子弟の教育を特別に担当するものがあらわれた。教育内容としては、修道院学校と同じく読み書き算術、讃美歌をはじめ、七自由科が教えられた。けれどもここでは、文法がとくに重んぜられ、後の文法学校 grammar school のひとつの起源となっており、また既述のとおり、この本山学校の発達したものから、中世の大学が生まれでたのである。

ところがこれらの諸学校は、オランダ人やノルマン人の侵攻の時代においてさまざまな困難に直面し、多くは全面的破壊の憂き目にあわねばならなかった。ヨーロッパ大陸においては、蛮族の侵入がいよいよ激化し、社会状態がますます安定度を失ってしまったために、本山学校の設立は非常に困難となってしまう。このことは、八二六年のラテラン教会会議の布告がのべているとおりである。

「いくつかの場所では、ひとつの文法学校のために一人の教師もなんらの寄付もえられないという不平がいわれていた。そこで、すべてのビショップたちは彼らに服属するものと、それから文法学校が必要であるとされている他の場所と、その両方のために、文法学校と自由学芸の原理をたゆまず教える教師をおくようにあらゆる注意と熱心を捧げるであらう。なんとなれば、これらの学校で主として神のいましめが公言され宣言せられるのであるから。」

修道院学校と本山学校の両者が中世初期の唯一の上級教育機関であったし、事実上教会の奉仕に指導権をもった人々はすべてこれらの学校のいずれかからでているのである。その上、これらの諸学校がますます重んぜられ、上級の研究への刺戟が与えられたことから、のちに大学が発達することとなった。また、多くの土地や金品が個人の手によって贈与されて文法学校が樹立され、カテドラルやほかの大きな教会学校によってなされた教育の仕事を補う役割を演じたのである。

ここで問題にしようとしている七自由科は、これら修道院学校や本山学校で教えられた高等教育の教養内容なのであり、蛮族の侵攻と社会の再建の時代を通じて、教会が意図的に保存しようとしたところの世俗的学問の総計を意味していた。さて、七自由科は三学（Trivium）と四科（Quadrivium）から成り、三学には、文法（Grammar）・修辞学（Rhetoric）・弁証法（論理学）（Dialectic, Logic）があり、四科には、算術（Arithmetic）・幾何（Geometry）・天文学（Astronomy）・音楽（Music）があった。これらの上に、倫理学あるいは形而上学がおかれ、さらにその上に、すべての学問のうち最大のものである神学が位置をしめていた。神学は中世初期においてはひとつの専門的研究を代表するもので、他の諸研究がつねにそれに向けて研究を続けたところの目標なのであった。こうした中世教育のシステムは、一五〇八年スイスのバーゼルで出された有名な中世写本の中のひとつの画にきわめてよく要約されている。⁽¹⁵⁾

ところで、七自由科のこれら諸科目がすべてどここの修道院、本山学校においても教えられたのではない。小規模な修道院や学校では主として文法教授が中心であり、それ以外の科目については僅かしか教えられていない。また、他の修道院や学校は三学を強調し、たぶん四科について余りふれなかったようである。七自由科の内容全体にわたって教えたのは、ごく少数の大きな学校だけであつたといわれている。以下、それぞれの科目についてカバレールの叙述によりながら調べてみよう。カバレールは、中世ドイツの偉大な神学者であり教師で、有名な教科書の著者であるフラバヌス・マウルス *Hrabanus Maurus* を引用しつつ七自由科の各科目を解説している。

(一) 文法——トリヴィウムの諸科目のうちで文法がまず基本科目としてきいしよにくる。文法は自由学芸の基礎であると同時に、その源泉である。マウルスによれば「文法は詩人と史家を解釈することをわれわれに教える学問であり、また、われわれが正しく話したり書いたりできるための技術である」。また、一一一九年ごろ出版された著書の序文で、「文法は、他のすべての諸学科の門番、どもる舌の適正な削正、論理学のしもべ、修辞学の女主人、神学の解釈者、医学の交代者、それからクワドリヴィウム全体のあっぱれな基礎」という定義が下されている。われわれが今日、文法という意味でいうところの文法につけ加えて、古代ローマおよび中世人の文法には、文書研究の分析的側面ともいふべきものが含まれている。たとえば、比較、分析、作詩法、韻律学、語形成、ことばのあや、言語表現などである。これらは人が聖書をよく理解して読むことのできるために必要なものとみなされ、かくして「その技術は世俗的であるが、それについて無価値なものはない」と

つない」とマウルスはいうのである。

教科書としてすぐれたものは、一四世紀にかかれたドナトゥスのものであった。そしてドナトゥスと文法とは同義語となるに至った。一六世紀にかかれたプリスキアヌスのテキストもまた広く使われた。これら教科書の記述形式は問答形式を採用していて、本文はむろんラテン語であり、普通教師がひとり写本をもつただけであつたから、生徒は記憶によって学ぶか、あるいは教師の口授によって書きうつすかして学ばねばならなかつた。文房具品が高価であつたため、多くの場合後者の方法は不可能であつたらしい。文法の学習がかなり進むと、簡単な読み方の練習または討議がなされたが、取り扱われる問題は通常宗教的・道徳的なものであつた。ラテン作家が許されているところでは、主としてヴェルギリウスが読まれた。スイスのサン・ガレンやその他数カ所でラテン作家の著作が読まれたが、他方トゥールでは、学識深い修道院長アルクインが修道僧たちに対して、「聖なる詩人たちがあなたのために十分である。あなたがたはヴェルギリウスのあの下品な調子で満ち満ちた詩で、あなたがたの心をよぶ理由は全然ありません」といつている。

(二) 修辭学——マウルスの定義によれば、修辭学というものは、日常生活の環境の中で世俗の論文を効果的に用いること、および説教者や宣教師が神の使信を雄弁な印象的なことばでおきかえることができるようになるための技術である。古代ローマの修辭学の多くは、文法として引きつがれていたのだが、その場合に多くの書簡とか法律文書の書類が付け加えられた。中世においては、聖職者が書記や法律家となつたことは注目されねばならない。そこで聖職者に対して当時の法律文書の準備が進められ、書簡を書いたり、法律文書の準備の技術は、修辭学研究の一部とせられ、市民法と教会法の両者の研究がしだいに始められるようになった。

(三) 弁証法（論理学）——マウルスによれば、弁証法または論理学は、理解の学問であり、かくして諸科学の科学であつた。これによって、人は虚偽の面皮を剥ぎ、誤りを暴露し、議論を系統立て、結論を正確に引き出すことができる。この研究は、倫理学のための準備、のちには神学のための準備のひとつであつた。用いられたテキストとしては、ポエティウスの準備したアリストテレスの諸作品からの抜粋、のちにはその全集があつた。中世初期には文法が七自由科中の主たるものであつたが、のちには弁証法がこれに取って代つた。諸大学がおこり、神学の諸学校の組織がなされてからのちには、神学とともに合理的科学がさかんとなり、逆に教理に関する事柄が弱くなり、中世後期の論争

のための準備として弁証法はその重要さにおいて第一の地歩をしめるに至った。

以上トリヴィウムの内容を構成しているこれらの三学科は、古代ローマの学問や諸学校に直接基礎をおくものではあるが、クワドリヴィウムの諸科目よりもはるかに、当時の教授知識の範囲内にあったより多くのものを含んでいたし、またより多くの要求のあった科目を含んでいた。そして、トリヴィウムの研究は、一三世紀以前はたいいの場合、神学研究の準備として十分な内容をそなえていたのだが、さらに進んで徹底的に準備したいと願った少数の人たちは、クワドリヴィウムの諸学科を学んだのである。しかし、上級グループのための教授をとくしない諸学校では、この四学科のいろんな要素のあるものが、トリヴィウムのためのテキストから教えられることがしばしばあった。とりわけ、算術、幾何、天文学の知識が西ヨーロッパにおいて非常に乏しかった中世初期にあつては事情はまさしくそうであった。それから、このクワドリヴィウムの諸学科の研究には、一定のきまつた順序というものはなかった。

四 算術——ローマ記数法が用いられている限りは、この学科でなされることが少ないのは自然であった。しかも、アラビア記数法は一三世紀初頭までは西ヨーロッパでは知られていなかったし、以後二、三世紀間も余りさかんには用いられなかった。算術がそれ以前の時代に教えられていたとするなら、それは修道院の修練士に対して与えられていたものより以上のものでは決してなかっただろう。もちろん例外として、計数の固有性に専心の研究がなされたり、教会の祝祭日の決定やイースターの日の計算、測定法（大きさ、長さ、巾など）を含んでいる聖書中の章節の解釈などのために算術の研究がなされることもあった。ところで、フラバヌス・マウルスによって八二〇年に発行された教科書「算術について」は、対話形式をとり、計数の固有性について説明がなされている。奇数、偶数、完全、不完全、合成数、平面、立体、基数、序数など。また、聖書にもとづく数の重要性の指摘がなされ、それから古代ローマ人のプランにならって指折り数えることの説明をくわしくしている。一〇世紀末近くに、ゲルベルト（のちの教皇シルヴェステル二世）は、かんたんな算盤を案出した。それ自身はかんたんなものであったが、当時は驚くべきものとせられた。これによって計算が非常にかんたんになったとともに、大きな数を取り扱うことができた。彼はまた大きな割算をかんたんにする形式を工夫し、彼の数表現の形式は、つぎの単純な加算の合計方法として示されるのである。しかし、アラビア数字の導入、零の使用までは、重要な算術の研究はできなかった。

アラビア式

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | 2 | 0 | 4 |
| 2 | 5 | 3 | 8 |
| | 4 | 5 | 5 |
| | 6 | 1 | 9 |
| 4 | 8 | 1 | 6 |

ローマ式

MCCIV
DXXXVIII
MMCCCCLV
DCXIX
MMMMDCCCXVI

ゲルベルト式

| | | | |
|----|------|-----|-----|
| M | C | X | I |
| I | II | III | IV |
| II | V | IV | VII |
| | VI | I | IX |
| IV | VIII | I | VI |

(四) 幾何——この学科は、一〇世紀にユークリッドからの引用がいくつか含まれているボエティウスの幾何学の作品が、ゲルベルトによって発見せられるまでは、ほとんど地理学および幾何学的形式に関する論証から成っていた。当時使用せられていた教科書によれば、ヨーロッパはもちろん、アジアおよびアフリカの地理が学ばれていたし、植物や動物についても若干紹介されている。また、マウルスによれば、幾何学は会堂や寺院の建築において認められており、ものさし、円、球、半球、四角形その他の図形が使用されている。ゲルベルトの時代以後、若干の幾何学本来の研究や土地測量の初歩がはじめられている。しかし、ヨーロッパにおける幾何学研究のはじまりは、正式にはユークリッドがアラビア語からラテン語に翻訳された一二世紀をもってするのである。

(四) 天文学——この学科の教授の目的は、季節と惑星の動きを説明すること、外界の創造の驚異を発表すること、聖職者がイースターやその他の祝日や祭日をきめることができること、会衆に彼らの祝祭を告げ知らせることにあった。けれども一一世紀頃でも、平坦な地球は天体の中心であり、地球の周囲を天体はすべて回転しているというプトレマイオスの理論は天文学教授においては価値のある絶対的に重大なものであった。また中世の天文学は占星術とまぜられており、流星とか惑星とか日食、月食のような現象の説明のために超自然的なものがとりだされている。天体の運動に関するコペルニクスの理論は、一五四三年になってはじめて出版され、近代の天文学の思想は実はこのときにその発端がみられるのである。

物理学は天文学の教授の一部として教えられていたが、そこでは物体の固有性や力学の単純な原理がその内容をなしていた。

(4) 音楽——他の諸科目の場合とはちがって音楽の教授はきわめて巾が広く、ごく早い時代から音楽理論が教えられていた。六世紀初めの作とされるボエティウスの「音楽について」がテキストとして使用された。音楽は教会の諸活動のなかに入りこみ、そしてこれは実に自然な形でとり入れられた。メッツの本山学校や、サン・ガレンの修道院はとくに音楽の中心として有名であった。

以上が七自由科の内容の概要であるが、ギリシャの学芸の *enkuklios paideia* との関連や、中世大学の教育内容の専門職業的性格との関連の問題は、今後の研究で探求したい。

註

(1) 文献目録については、C. H. Haskins: *The Rise of Universities*. (Great Seal Books) 2nd ed. 1959. の巻末に T. E. Mommsen によつて大へんゆきどいた解説がなされているし、ラシダールの著書には、各章ごとに関係の史料や文献が列記してある。私がこの研究のために直接参照したものは、これらのうちのごく一部にすぎないが、以下に付記しておく。

P. H. Denifle: *Die Entstehung der Universitäten des Mittelalters bis 1400*. 1855. G. Kaufmann: *Geschichte der deutschen Universitäten*. 1888. H. Rashdall: *The Universities of Europe in the Middle Ages*. 1895. L. Thorndike: *University Records and Life in the Middle Ages*. 1944 (2nd ed. 1949). M. L. W. Laistner: *Thought and Letters in Western Europe, A. D. 500-900*. 1931. (New ed. 1957). ただし、ラシダールのものは、一九三六年に新版が出ている。(Ed. by F. M. Powicke & A. B. Emden)。石原謙「大学の成立と発達歴史」(「中世キリスト教研究」昭和二十七年、所載)、皇至道「大学制度の研究」昭和三〇年、梅根悟「中世ドイツ都市における公教育制度の成立過程」昭和三二年。

(2) 梅根氏は、この点に関してサヴィニーの指摘を引用して、史料の不足のために的確な説明がなされていないのであるが、この史料の不足という事柄自身が、実は中世大学草創の事情を示しているともいえるという。中世史の史料の大部分は寺院、修道院、宮廷および市庁などの公的機関に保存されている。これらの機関によつて発せられ、あるいは記録された公文書、公式記録、台帳などの類いがそ

れである。そしてこの種の文書によっては大学の発祥期の事情を知ることができない。ということは、大学がこのような公的機関の域外にあった非公式の存在であったことを暗示している。大学の草創が中世都市の一隅に、教会や国王や市政府など、いかなる権威にも支配されることなく、また保護されることなく、全く自由に発生した私塾的存在に端を発したものであることは、サヴィニーによって指摘され、多くの史家の認めるところとなっている。それ故にこそ、それは何等の公文書にも現われず、記録と文書の外にあって自由を享樂していた。それが公けの文書に記録されず、今日、史家がその研究に困却すること自体のうちに、この新しい学校の性格が示唆されているということが出来る。(梅根悟、前掲書、一四—一五頁)

- (3) ここにあげた二つの理由のうち、前者については、ハスキンスがつぎのようにいつている。「大学は、ロマネスク、ゴシックの寺院や議會とおなじく、中世紀の産物である。奇妙に思われるだろうが、ギリシャ、ローマ人は過去七、八世紀間もちいられてきた意味での大学をもっていなかった。かれらも高等教育はもっていた。だがこのことばの意味はいま述べたものと同じではない。かれらの法律・修辭・哲学における教育は比類のないものだ。だがこの教育は学問の恒久的な制度にまで組織だてられはしなかった。ソクラテスのような偉大な教師でも卒業証書を与えはしなかった。もし現代の学生が三ヵ月もかれについて学ぶならば、この学生はおそらく証明書、つまり何かしら手にとってみたり、人に示したりできる修学の証書を要求するだろう。われわれにしたい組織的教育の諸特徴、たとえば、学部や学寮、学科課程、試験と卒業式そして学位といったものにあらわれた教育の機関は、すべて一二、三世紀にはじめてこの世にあらわれたものである。これらのすべての点においてわれわれはアテネやアレクサンドリアではなく、パリとボローニアの遺産相続人であり後継者なのだ」(C. H. Haskins: *The Rise of Universities*, p. 1 f. 堀米庸三「大学の起源」『世界の歴史 8「ヨーロッパ封建社会」』一七七頁)

後者については、勝田守一「大学の自由の理念とその条件」(『思想』第四二七号、一頁以下)による。なお、勝田論文の当該箇所は、S. D'Irsay: *Histoire des Universités*, Tome I, p. 226. によっている。

- (4) C. H. Haskins: *The Renaissance of the 12th Century*, p. 369.

- (5) ラシドールによれば、中世の文書を一つずつすれば、*university* という語の意味は、たんに人々の集まりとか多数ということにすぎないことが明らかになる (*merely a number, a plurality, an aggregate of persons*)。人々の集団に宛てられたひとつの手紙のなかで、*universitas vestra* というとき、その意味はたんに *the whole of you* (あなたがたのすべて) である。さらに進んで、より専門的な意味においては、*universitas* は法的団体、ないし法人を意味する。そしてローマ法では、実際には *collegium* と同意語であった。ところが、一二世紀末、一三世紀初めには、教師の団体か学生の団体かのどちらかにこの語が適用されているのが判る。けれども、このことは他の団体に対しても同様であり、ことに当時新しく組織せられたギルドや都市の住民たちに対して適用されることが長く続いた。他方、学問的なギルドに対して適用せられるときには、はじめのうちは *community* とか *college* のような語が交互に用いられていたのである。そしてはじめはこの *universitas* は決して独立に用いられることはなく、その用語法はつねに *University of Scholars*, *University of Masters and Scholars*, *University of Study* などとしてであった。その用語がしだいにギルドもしくは団体の中で特殊な種類のものに限られるようになってきたのは、ちょうど修道院 *convent*、軍団 *corps*、集合 *congregation*、カレッジ *college* といった語が、一定の特殊な種類の連合を言いあらわすように限定されるようになったのと同じく、ひとつのたんなる偶然事なのである。この *universitas* という語は、中世においては一般に教師のものであろうと学生のものであろうと、要するに学問的な団体について使われたのであって、その集団がたてられた場所について使われたり、またはその集団としての学校についてさえ使われたのではないことは、とりわけ注目すべき重要な点である。学問の機関——学校もしくは学校を保持したところの都市——を抽象的に言いあらわすために用いられた語は、*universitas* よりむしろ *studium* であった。(H. Rashdall: *The Universities of Europe in the Middle Ages*, New ed. Vol. I. p. 5.f.)

(6) 篠原助市「独逸教育思想史」上巻、一七頁。

(7) 一一五八年フリードリヒ一世の発した *Habita* については、主として梅根悟「中世ドイツ都市における公教育制度の成立過程」(一六頁以下) によった。同氏の脚註によれば、*Habita* が発せられるに至った事情は、当時書かれた長詩の中で物語られており、その詩

の信憑性についてデニフレとカウフマンの間に意見の相違があるが、同氏はカウフマンを採用している。

また同氏は *Habita* が後代において過大評価されているのをいましめている。「そこには学校統制の意図などは全然見られないとともに、またそれは学校の公認というような性質のものでもなく、さらに後世の意味での *akademische Freiheit* というようなものも含まれてはいない。それは単に諸国、諸都市を渡り歩く学徒の群が、しばしば彼等の仲間のある者が放蕩無頼の生活と行為をすることもあって、そのために善良な学徒が罪なくして市の警察に拘禁されるということが起りつつあったのにないして、学徒たちの肩をもってやったという程のものであった」(一七頁)。

(8) 教皇による学徒保護の事情については、梅根悟、前掲書(一七頁)によった。これもカウフマンからの採用である。

(9) ボローニアにおける外来学生の団体は、一三世紀中葉ごろから後は、この二つの組合、つまり *universitas citramontanorum*(アルプスのこちら側の者の組合)と、*universitas ultramontanorum*(アルプスのあちら側の者の組合)からなっているが、それ以前は、⁽¹⁾ *Lombards* ロンバルディア、⁽²⁾ *Ultramontanes* アルプス以北、⁽³⁾ *Tuscans* トスカナ、⁽⁴⁾ *Romans* (Campanians) ローマ(またはカンパニア)の四団体にわかれていた(Rashdall: *op. cit.* I. p.514 f.)

また、このような団体は当然のことであるが都市によって違っている。パリの場合は、⁽¹⁾ *French* フランス、⁽²⁾ *Normans* ノルマンディー、⁽³⁾ *Picards* ピカルディー、⁽⁴⁾ *English* イギリスの四国民^{キトン}にわけて集団が作られており、それらはさらに小集団 *tribe* に区分せられた。たとえば、フランスはさらに *Paris* パリ、*Sens* サン、*Rheims* ランス、*Tours* トゥール、*Bourges* ブールジュの五つにわけられていた。これらネーションの間にはほとんど理解や交流はなく、むしろ対立や争いがたえなかったといわれている。カバレーは、当時の学者ヤコブス・ド・ヴィトリアコ *Jacobus de Vitriaco* がパリの学生生活について記録しているのを紹介している。それによると、「パリの学生たちはただだんに違ったセクトや議論について論争をしたり、論難したりするだけではなく、国の相異が彼らのうちに不和、憎しみ、悪意にみちた怨恨をひきおこした。そして彼らはおたがいに對して、厚かましくもあらゆる種類の侮辱的言行をのべあった。彼らは『イギリス人は飲酒家で尻尾がある。フランスの息子どもは高慢で、懦弱で、女のように注意深く飾る』と肯

定するし、また『ドイツ人は祭りには怒りたけつてみだらであり、ノルマン人は虚栄で高慢であり、ポアトゥ人は裏切りもので冒險ずき……』。(E.P. Cubberley: *The History of Education*, p.223)

(10) 学徒団体と都市当局との関係、および学徒集団の他市への移住の事情については、梅根悟、前掲書(一八頁以下)によった。この個所もやはりカウフマンからの採用である。

(11) 實際上、中世の学校であらゆる学部、学科をもっていたところはほとんどなかった。最高の名声をかちえていたパリ大学さえ、市民法の学科はなかったのである。(Rashdall: *op. cit.* I. p.6.)

(12) Rashdall: *op. cit.* I. p.8.

(13) 堀米庸三「大学の起源」(「理想」第三三五号所載)

(14) 七自由科に関する特殊研究はいくつかあるが、まだみていない。しかし、ギリシャの *enkuklios paideia* との関係で考察しなければならぬと思う。本稿では、E.P. Cubberley の前掲書によった。

(15) この画は、文字の手ほどきをうけて、読み書きができるようになり、音楽や計算の初歩を学んだ若者が、知識の寺院へ進んでゆくその有様をのべている。賢者(知恵をあらわす)が寺院の扉の穴に鍵をいれている。その扉には *congruitas* (文法を意味する)ということばがかいてある。その寺院の一階と二階では、ドナトウスとプリスキアヌスの文法を学び、三階にゆくとまずアリストテレスの論理学を、ついで修辞学と詩を学び、これで三学をおわる。さらに三階でボエティウスの算術をすませて、四階へのぼり、ここで四科の学習にうつる。ピタゴラスの音楽、ユークリッドの幾何、プトレマイオスの天文学という順序で進み、若者はいよいよ哲学、物理学、セネカの道徳集、ペトルス・ロンバルドゥスの神学(または形而上学)を研究して最後の目標に達するわけである。(Cubberley: *op. cit.* p.154.)